

# 森の再生、 言葉の再生

～生物・文化多様性の回復を目指すタイ・チョン族の挑戦～

เม็เม็





## はじめに

### ～なぜ「メコンの豊かさ」にこだわるのか～

私たちメコン・ウォッチは今からほぼ20年前、メコン河流域の開発を監視するNGOとして活動を開始しました。それ以来、日本の政府開発援助（ODA）や民間投資で建設されるダムや道路がメコン圏の自然や社会を破壊し、人びとが貧しくなっていく光景を何度となく目撃してきました。暮らしをだいなしにされた人たちからは日本に対する怒りや戸惑いの声も聞かされてきました。ところが、日本の市民の間に開発がもたらす悪影響への認識が十分に高まってきたとは思えません。

なぜなのでしょう。私たちは、ひとつには、日本に住む多くの人びとが「途上国は貧しい。だから開発援助が必要なのだ」と思い込み、開発に対してあまりにも無批判になっているからではないかと考えています。メコン河流域に広がる自然や社会を「貧しい」の一言で片づけることはとうてい不可能です。雨季と乾季で激しく増減をくり返す網の目のような河川。産卵と成長を求めて何千キロも回遊するおびただしい魚群。木々、花々、薬草、キノコ類、獣や鳥や虫たちであふれる無数の森林。ここで生きることを決めた人びとは、変化に富む自然を利用して暮らす知恵を身につけ、その場に合った社会や文化を育んできました。それは貧しいどころか、川に行けば魚が捕れ、森に行けば山菜が採れる、豊かな生活でした。私たちは開発や開発援助を否定しません。ただ開発や援助の手は、すでにある大切なものを壊さないように、目と耳を凝らしながら遠慮がちに差し出すものではないかと思っています。それで機会を見つけては、メコン圏の自然や社会の様子、人びとの声を伝えようとしてきました。

この冊子を作った目的も同じです。今回は文化や言語も話題にして、失われつつある生物や文化の多様性をなんとか再生できないかと奮闘する人たちの姿を取り上げてみました。これまでのメコン・ウォッチの出版物と同様、メコンの豊かさを知っていただくきっかけとなれば、それ以上にうれしいことはありません。

## 森の再生、 言葉の再生

～生物・文化多様性の回復を目指すタイ・チヨン族の挑戦～







# 生物多様性と文化多様性の交わり

多様な生物が生息する場所には多様な民族が住んでいます。  
生物と文化の多様性は一体としてとらえる必要があります。

## 二つの多様性

2010年10月、愛知県名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催され、日本でも「生物多様性」のことがかなり話題になりました。たくさんの種類の生きものが存在するのは大切なことです。そしてもっと大切なのは、どんなにからだ小さな生物であっても、個体数が少ないものでも、生態系の一部という点では仲間だということです。人間の経済活動に重要かどうかは関係ありません。でも人間も生態系の中でしか生きられない以上、人類の生存という大きな課題を考える際には、今存在する生物が今後も存在しつづけることがきわめて重要な意味をもってきます。この貴重な生物多様性が経済のグローバル化や地球規模の環境破壊によって脅かされています。危機に直面する生物の多様性をどのように守るかという全人類的な課題が、COP10開催の背景にもありました。

今、大きな世界地図の上にあらゆる種類の生きものを点で書き込んでいったとします。すると、おびただしい数の点が赤道近辺に集中していきます。暖かい地域に住む生物が多様化するのには、太陽の強い光を受けていろいろに進化してきたからだと言われます。さて今度は、同じ地図に人びとの分布を書き込んでみると、生物の多様なところに数多くの民族が住んでいることが分かります。生物と文化の多様性はどうか重なりあっているようなのです。なぜこのような重なりが生じるのでしょうか。

変化に富む自然環境がさまざまな文化や社会を担う人びとを育ててきたのかも知れません。逆に、固有の文化の発達はその社会に不可欠な環境を維持させてきたのかも知れません。あるいは、独自の文化や言語を持つことで人びとが民族としてのアイデンティティを強め、外部から影響が加わるのを容易に許さず、それが文化と生物の多様性の保全につながっているとも考えられます。いずれにせよ、生物と文化の多様性は互いに連関

するものとして考えた方がよさそうです。

生物の多様性が脅かされているように、文化の多様性も危機の時代を迎えています。ある研究者は、現在世界に存在する約7,000種類の言語のうち、21世紀の末までに2割から半数が消滅するだろうと警告しています。ダムや道路の建設で先住・少数民族が先祖伝来の土地を追われることがあります。居住環境の激変によってそれまでの社会や文化のありようは一変してしまいます。教育政策によって数や力で勝る民族の文化や言語を先住・少数民族に押しつける国もあります。グローバル化の進展で情報技術、マスメディアや映画、英語が力を強めていることも関係しているでしょう。

## 知恵や権利としての文化多様性

文化や言語が消滅するとどうなるのでしょうか。まず、人類にとって大切な知識や知恵が失われてしまう可能性があります。薬草の名称や効用がよい例で、工業先進国に住む人たちが病気の治療に使う薬ももとをたどれば先住・少数民族の知識や知恵がもたらしたものが少なくありません。また、生物の多様性とと同じく、文化や言語もなにかの役に立つかどうかにかかわらず多様に存在すること自体に意味があると言えます。だれにでも自分が大切にしたい生活様式や信条があります。だれにでも大切にしたい言語があるはず。どんなに少数の人たちしか使わない言葉であっても、その人たちがその言葉で自分の意見や気持ちを一番すっきりと表現しあえるのなら、その人たちにはだれにばかすることなくその言葉を使う権利があると言ってよいでしょう。

タイの東部に住むチョン族の人たちを取りまく自然や社会もこの50年ほどで大きく変化してきました。自分たちが大切にしてきた自然や文化が消滅してゆく姿を目の当たりにして、チョンの人たちはこれをなんとか取りもどせないかと行動しはじめました。これからチョンの人たちの奮闘の様子を紹介します。 M



メコン河流域の生物、人、文化。中国西南部、ビルマ(ミャンマー)、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムを流れる全長4,800キロのメコン河は水生生物の多様性で世界第二位を誇る。流域では多くの先住・少数民族が河川や森林の恵みを利用した暮らしを営んでいる。







# チヨン族の人びと、暮らし、文化

タイに住むチヨン族の日常生活は一般のタイ人とさほど違わなくなりました。チヨン語がチヨン族のアイデンティティの基盤になっています。

## チヨン族を訪ねる

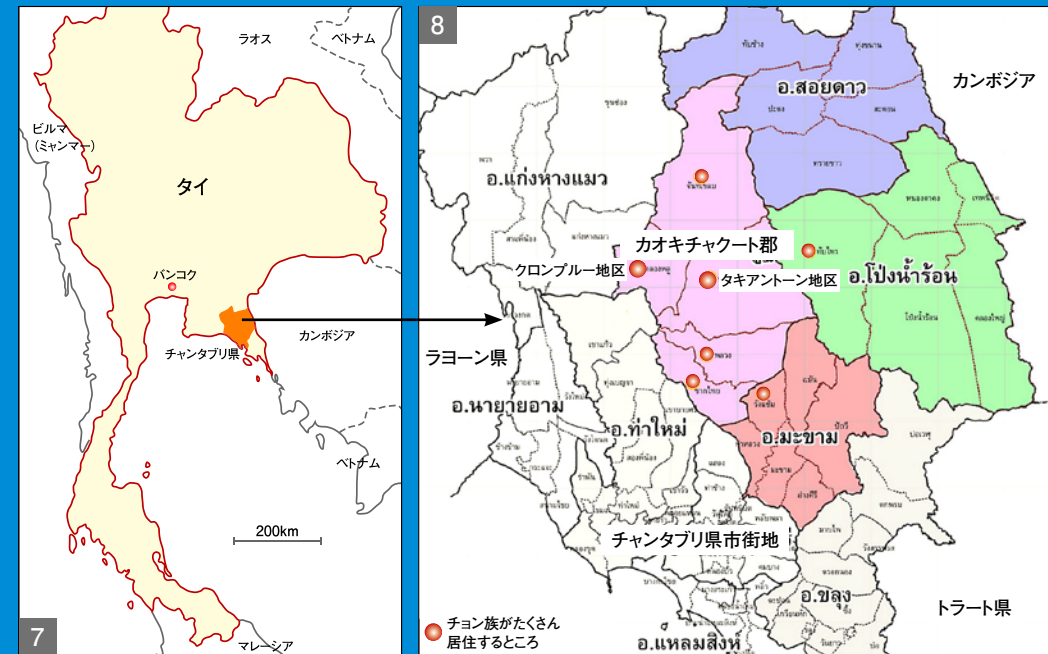
チヨン族を訪ねるにはタイの首都バンコクから路線バスに乗って東の方向に約3時間半、まずチャンタブリ県の市街地を目指します。チャンタブリ県はその一部をお隣の国カンボジアと接するタイ最東部の県で、南にタイ湾を望む風光明媚なところ。ドリアン、マンゴスチン、ランブータンなど、南国特有の果物の産地としても有名です。市街地に到着したらトラックを改造した乗合いバスに乗りかえて、今度は北に位置するカオキチャクト郡に向かいます。乗合いバスに揺られる40分ほどの間、右手にはやがて山脈が見えはじめ、雨のあとには斜面に数条の滝が姿をあらわします。道路はきれいに舗装されていて、時々店舗やお寺や学校の前を通りすぎます。この道路のおかげでチヨンの人たちの生活は昔と比べるとたいそう便利になりました。一方で道路が整備されたことにより町との往来や町に住む人びととの交流の機会が増え、村の外からの影響も強まっていったのです。

チヨン族はチャンタブリ県の各所に住んでいますが、カオキチャクト郡のクロンプルー地区とタキアントーン地区の二カ所に特に集中しています。また、チャンタブリ県の東にあるトラート県には祖先が共通するとみられるガソーン族が住み、西隣りのラヨン県にはチヨン族に由来するとみられる地名も残っています。14世紀に当時のクメール王朝を訪問した中国の外交官が、もともと山林に住みながらクメール人の下に奴隷として仕えている「チョウオン」という人びとのことを記録に残しています。「チョウオン」がチヨン族の先祖だという決定的な証拠は見つかっていませんが、こうした情報を総合すると、どうやら現在のタイ東部からカンボジア西部にかけてかなり昔から居住していた民族だろうと推測することができます。現在、タイ国内のチヨン族の人口は4,000人ほどだと云われています。

## 「チヨン」とは「人」なり

チヨン族のふだんの服装や暮らしぶりは一般のタイ人と似ていて、はじめて訪問した人には見分けがつかなくいかも知れません。実際、チヨンの人たちは、「自分たちはタイ国民である」と意識しています。そんな中でチヨンの人びとが民族のアイデンティティの基盤として大切にしているのがチヨン語です。言語学者はチヨン語を「オーストロアジア語族モン・クメール語派ペアル語群」に分類し、一般的にはタイ語と違う言語系統に区別して、むしろクメール語（カンボジア語）の遠戚であると考えています。実際のところチヨン語の日常の語彙はタイ語とはかなり異なり、一方で「犬」や「ご飯」といった単語はクメール語と起源を同じくしています。また、タイ語に独特な「声調」と呼ばれる音の抑揚を使わず、代わりに母音を発音する際に声帯の振動を微妙に変化させることによって単語の意味の違いを伝えたりします。このような発声を四種類にも使い分ける言語は世界でも珍しく、言語学者も注目しています。ちなみに「チヨン」とはチヨン語で「人」という意味です。自らを民族として意識して名乗る時、チヨンの人びとは「チュム・チヨン」（チヨン族）と言います。「チヨン語」はチヨン語で「バサー・チヨン」です。

チヨンの人びとはみんな、50年ほど前までは日常生活でチヨン語を使っていました。しかし、今ではタイ語を母語とする人たちが増え、家庭でもほとんどチヨン語を使わず、チヨン語を流暢に話せる人は200名ほどに減ってしまったと云われています。20才未満でチヨン語を使えるチヨン族はほとんどいません。でも50代、60代以上の人たちは今でも自分たち同士の会話ではチヨン語を使います。例えば、各家庭が夕餉の時を迎える頃、家の前を顔見知りのチヨン族が通りかかると、その家の主人（あるじ）は「ホプロム！」（飯、食べてよ!）と声をかけたりします。 M



チヨン族の村の様子。①水田。②チヨン族の家。上がってすぐ来客と歓談できる広間がある。③果樹園で作業するバンウーンさん。④ゴム園。⑤果物の出荷。⑥市場。⑦チャンタブリ県の位置。⑧チヨン族の居住地を示す地図（マヒドン大学アジア言語文化研究所作成）。⑨カオキチャクト郡を示す標識。







# 自然を使い、 自然を蘇らせる

チョン族は「森の民」です。植物や薬草を使う知識と知恵に長け、森の恵みをみんなで分かちあいます。

## 森の知恵、知恵の森

チョン族はもともと森で野生の鳥や動物を狩り、野菜やキノコを採って生活の糧としていました。しだにお米作りをはじめ、今ではゴム園や果樹園を営む家庭が多くなりました。雨季が本格化する前の4月から6月頃にカオキチャクト郡を訪ねると、原色の果物を出荷する人びとの快活な姿が見られます。果樹栽培はけっこうな現金収入をもたらす、広い土地を所有する世帯も少なくありません。でも森での仕事が減っても、チョンの人びとは自分たちを「森の民」だと言います。

クロンプルー地区にはチョン族が共同管理する雑木林があり、広さは4ヘクタール(4万平方メートル)です。付近に住む人たちならだれでもここで野菜や薬草を採ってかまいません。ただし、木を切ってはいけない決まりになっています。元来チョン族は木々に精霊が宿り、木を切り倒した者には厄災がふりかかると信じています。どうしても切らないといけない時には、事前に儀式を行って精霊の許しを請うと云います。

共有林の再生と保全にひとときわ熱心なチューンおじさんは、これまで40年間以上も地元のリーダー役を務めてきました。地区長に選ばれたこともあり、今でもみんなから「チューン地区長」と呼び親しまれています。ある小雨の朝、私たちはチューンおじさんに共有林を案内してもらいました。おじさんは立ち止まっては目の前の木の葉や草を手にとって、「この草は食べられる。ちょっと苦いけどね」、「こっちの葉っぱはお菓子なんかを包むのに使えるんだ」、「この厚いのはむかし、懐中電灯なんかない頃には、火をつけてたいまつにしたよ」と次から次へといろんな用途を解説してくれます。

紫の小さな花を見かけた時は、「この花の実がこうやってはじけると、しとしと雨が二週間は続くんだ」と天気まで予報してくれました。摘み取った森の植物はその日の食卓にのぼります。タイ料理に「ナムプリック」と呼ばれる、野菜や魚につけて食べるソースがあり

ますが、チョン族の作るナムプリックは森の幸(さち)を入れて、タイ風よりもさらに辛く味付けをします。

大切な共有林ですから守り育てるためにはいろいろ工夫もしてあります。周囲に側溝を掘って水を貯めているのは森を火災から守るためです。また「共有林」と書いた掲示板を立てて住民たちに自覚を促しています。最近では森の中にある貯水池の取水ポンプの電源にソーラーパネルで集めた太陽光エネルギーをあてるなど、環境を意識した技術も試しています。共有林は食べもののためだけではなくありません。子どもたちが先生や年配者からチョン語で植物の名前や効用を学ぶ場にもなります。森を知り、森をうまく使うことが森を蘇らせることにもつながります。

チョンの人びとは天然ゴムやカルダモン(ショウズク)などの香辛料、白檀(ビャクダン)や沈香(ジンコウ)の一種と見られる香木の栽培や扱いにも秀でてきました。植物にとっても詳しいヌーおじさんを訪ねると、チョン語で「ウート・マホーム」と呼ぶ香木についていろいろと教えてくれました。おじさんは自宅の奥に手製の蒸留器を持っていて、まず鍋の部分でウート・マホームの木片を煮込みます。この時に出てくる蒸気を水に通してやると油分が表面に浮いてきて、これを線香や香水に混ぜるととてもよい香りを放ちます。「まず、ウート・マホームの幹をちょっと削って火をつけてみるんだ。すぐ消えてしまう時は樹脂が十分含まれていないから、香料を取るには早すぎる」とヌーおじさんは香料採取のコツを教えてくださいました。また、おじさんはウート・マホームの木片でお茶をいれて、毎日何杯も飲むのだそうです。健康を増進するというので私たちもさっそく試してみましたが、ほのかな苦みと甘さがあります。チューンおじさんもそうでしたが、ヌーおじさんは植物のことを話す時にはとっても楽しそうでした。こんなにいいことを知っているのだから、みんなに伝えたくて伝えたくて仕方がないという気持ちでいっぱいなのがよく分かりました。 M



①貯水池。②太陽光パネルに満足気な住民リーダーの一人モンティアンさん。③共有林の様子。④ウート・マホームの幹を削るヌーおじさん。⑤天気を占う紫の花。⑥木を手にとって説明するチューンおじさん。⑦森の幸を活かした夕飯。中央の二つのお椀に入ったソースがチョン風のナムプリック。左下の大皿の野菜をつけて食べる。



チョン族の文化の回復を目指す活動は、  
 小学校でチョン語の授業を始めることによって大きく前進しました。

## チョン語のための文字を作る

チョン族がチョンの文化を再興しようと本格的に活動しだしたのは1990年代末です。タイ・マヒドン大学にある「農村開発のための言語文化研究所」(当時)から協力が得られるようになった2001年には、チョンの人びとが中心となってクロンプルーとタキアントーンとの二つの地区で実態調査が行われました。住民約2,000人を対象にしたこの調査では、日常生活でチョン語をどのくらい使っているかといった項目とあわせて、チョン文化の再生に対する意見を求めました。その結果、90%以上の人たちがチョン文化の復興に賛同していることが分かりました。

では、実際にチョン文化を回復するにはどうすればよいのでしょうか。チョンの人たちは学校でチョン語を教えることを考えました。チョンの親たちが家庭で子どもや孫に向かってチョン語を話さなくなった理由のひとつは、自分たちが子どもの頃に学校でチョン語の使用を禁じられたからです。チョン語を使って先生に叱られた体験を持つ人もいます。当時の学校の先生たちは、チョン語を使うと子どもたちがタイ語を学ぶ障害になると考えたのです。学校でチョン語を禁じられた体験がやがてチョン族の間に自分たちの祖先の文化や言葉は受け継ぐ価値のないものだとの考えを広め、さらにはチョンであることの劣等感にもつながっていきました。こうした過去の経緯から、学校でのチョン語授業はチョンの人びとの願いになりました。折しもタイでは1997年、非常に民主的と評価の高い新憲法が制

定され、第30条は民族や言語による差別を禁じ、同時に差別解消の手段を講じることを奨励しました。また、教育改革の一環として地域学習の授業が重視されるようになりました。こうした動きもチョンの人たちには追い風になったのです。

学校でチョン語を教えるにはチョン語を書く文字が必要です。チョン語には固有の文字は存在しません。そこでマヒドン大学の研究者らの助言を取り入れながら話し合いや作業を重ね、2001年、チョン語を表記する文字が完成しました。一つひとつはタイ文字ですが、全体としてチョン語の特徴をとらえられるよう工夫が凝らされています。チョン語を書く文字ができたことで動植物の名前や地名、昔話や物語をチョン語で記録することもできるようになりました。またチョン語を読む機会を増やすために、みんなで絵本も作成しました。絵があることで興味や理解が増し、お話の方もチョン族になじみの深い地名や人名を使うなど、楽しみながらチョン語が学べるようになっていきます。その後もカリキュラムを作成し、生徒の手本となるチョン語が使える人を見つけて先生としての訓練を受けてもらうなどいろいろ苦労を重ねて、2002年、ワット・クロンプルー小学校で3年生の「地域学習」の一環として1回1時間、週3回のチョン語授業が始まりました。かつて禁じられたチョン語が正式に学校に戻ってきたのです。現在、ワット・クロンプルー小学校で4年生から6年生まで週1回、ワット・タキアントーン小学校でも同じ3学年で週2回、チョン語の授業を実施しています。チョン族でない子どもたちもいっしょに授業を受けています。



①ワット・タキアントーン小学校。②ワット・クロンプルー小学校。③～⑤ワット・タキアントーン小学校での屋外授業の風景など。薬草医のラック先生から受取った葉を生徒たちに示しているのが担当のチャイナローン先生。⑥と⑦ワット・クロンプルー小学校のチョン語授業の様子。担当しているのはルンベット先生。



## チョン語を窓口に子どもたちは自然を学ぶ

小学生が相手ですし、チョン語の先生のモットーは楽しめる授業です。授業でできるだけチョン語を使うにはジェスチャーで意味を伝える工夫もいります。「トータル・フィジカル・レスポンス」(TPR)という教授法をよく使いますが、TPRでは先生が「立って、右手をあげて、前のお友だちの肩において」などとチョン語で指示を出し、生徒はその通りの動作をしなければなりません。私たちはワット・クロンプルー小学校のルンペット先生の授業を参観させていただきましたが、先生はこの日も鳥になったり、田植えのまねをしてみせたり、なかなかたいへんそうでした。生徒が前に呼ばれて先生のまねをすることもあれば、生徒同士でチョン語を練習することもあります。

ワット・タキアントーン小学校では上級の学年になると屋外授業を奨励します。この日は6年生の授業にゲストでチョン族の薬草医ラック先生が招かれました。担当のチャイナローン先生は、まず教室で生徒たちにこれから野外で学ぶ植物の名前、特徴、効用などをタイ語とチョン語でしっかりノートに書きこむよう念をおします。準備ができたならさあ出発。正門を出たところにもうたくさんの植物が自生しています。ラック先生は葉や実や茎をちぎっては生徒たちに示し、「この葉は苦いけど、煮汁を飲むと解熱の効果があるんだよ」、「この実はちょっとすっぱいけど腹痛に効く。味見してごらん」と説明していきます。友だちの背中を机代わりにして書きとる子もいれば、葉っぱや実を口に入れている子もいます。生徒たちは植物名だけでなく、チョン族の伝統的な知識や知恵も同時に学んでいきます。この日の屋外授業は学校の周りで終わりましたが、共有林に出かけることもあれば、国立公園内の山や滝まで遠出して自然を全身で感じながらチョン語を学ぶこともあります。授業のない日曜日、学校に来ていた小学生たちに集ってもらい授業の感想を聞いてみました。みんなに一番人気のあったのは滝まで足をのばす屋外授業でした。

子どもだけでなく、大人たちにもチョン語やチョン文化に触れる機会が必要です。そこで、2004年にはチョン文化学習センターが開館しました。館内にはチョン語の植物名やチョン族の伝統的な道具が展示されているほか、資料も保管されています。みんなで集まって話合ったり、チョン語を勉強したり、他県から訪問客がある場合は出迎えの場になったりもします。センターの設立目的にはチョン族以外の人びとにチョン文化を理解してもらうことでもあります。M



①チョン文化学習センターの正面。左側は話合いなどに使えるオープン・スペース。  
②表看板にはタイ語で「チョン文化言語復興学習センター」と書かれている。③内部に掲示されたチョン語の植物名や解説。④内部の展示の様子。

### 5 ตัวนั่งชื่อพะชาซ่อง

พยัญชนะภาษาซ่อง

ก	ค	ง	จ	ช	ซ	ญ	ด
กูป	ค้อน	งัว	เจด	ซอ	ซี้	ฉู๋ม	ดุง
ต	ท	น	บ	ป	พ	ฟ	ม
ตุง	ท้าม	น่อง	บุษ	ปาว	โพน	ฟุง (ซิม)	เม้ว
ย	ร	ล	อ	ว	ฮ		
ยาง	ร่อง	แลก	อุด	วา	ฮาย		

#### ตัวซ่งก้อด

-ก	-ง	-จ	-ญ	-ด	-น	-บ	-ม
เกือก	ปาง	กระบุด	ฉู๋ม	มาด	ฉู๋ม	ฉู๋ม	ฉู๋ม
-ย	-ว	-ฮ					
ลู๋ย	เพล่ว	กระเพ็ช					

ผลิตโดย: โครงการอนุรักษ์และฟื้นฟูภาษาถิ่น: ภาษาซ่อง, วัฒนธรรม, ศิลปวัฒนธรรม, สถาบันวิจัยภาษาและวัฒนธรรมเอเชีย มหาวิทยาลัยมหิดล, ฉบับทดลองพิมพ์: พ.ศ. 2545



⑦チョン語の手作り絵本。上は「カエルを追いかける犬」。下が「野良仕事に出かけるおじいさんとおばあさん」。授業中に生徒全員で文字を読む練習に使ったりする。

# พะชาซ่อง

## チョン語を表記する

タイ語の子音を表記するには44の文字を使うが、同じ音でも声調で書きわける文字や、ほとんど使わない文字がある。チョン語にはタイ語のような声調がないので、「一音一字」を原則に22のタイ文字を選び、チョン語を表記する方法を考案した。個々の文字はチョンの人たちが話し合っ選んだ。母音についてはタイ文字をほぼそのまま使っている。各文字は「[クープ] (カエル) の「ク」の字」といった具合に、その文字を使う代表的な単語と挿し絵を示して一覧表にしてある。⑤がチョン語の子音文字表。上段は語頭で、下段は語末で使う子音文字の一覧。⑥は母音文字表。上段が母音、下段が母音の変化を表す文字である。

### 6 ตัวซ่งระ ตัววันนะยุคพะชาซ่อง

สระและวรรณยุกต์ภาษาซ่อง

#### ตัวซ่งระ

-ะ	-า	-ิ	-ี	-เะ	-เ	-แะ	-แ
กระละ	กระตา	มัดตะงิ	ซี้	เตะ	เปด	แพะ	แซ
-อ	-อ	-โอะ	-โ	-อ	-อ	-โอะ	-โ
กรีบ	กระพ้อ	เตอะ	กระพ้อ	กระชู่	กระชู่	กระโม่	กระโค
-เาะ	-อ	-อ	-อ	-ว	-า	-อ	-อ
เาะ	ซอ	ซูกเป็ช	เกือก	บัว	กำตี	โส	เอา

#### ตัววันนะยุค

-	-	-	-	-	-	-	-
วา	ยาง	ปาว	ครา	กระว่าย	ร่อง	มะง่าม	กระถ่าง
๕	๕	๕	๕	๕	๕	๕	๕
ค้อน	ฉู๋ม	ท้าม	ชู่จ	เม้ว	ลู๋ย	ร้อย	กิ้น



# 人びとの 出会いと広がり

きっかけは文化の消滅を憂うチョン族の年配者とタイ人の研究者との出会いでした。チョン族の活動はタイに住む他の先住・少数民族にとっても刺激になっています。

チョン文化の回復に向けた活動は、ひとつの出会いがきっかけとなりました。1994年、チョン文化の消滅を憂うチョン族の年配者たちのもとをマヒドン大学のタイ人研究者が訪れました。この時の研究者の目的はチョン語の調査でしたが、その後もチョンの人びとから民族の将来への不安や言語・文化再生の願いを聞くうちに、双方に行動に向けた協力の機運が高まりました。チョンの人たちも研究者が興味を示すことで自分たちの言語や文化の価値を再認識していきました。

2001年に本格化したチョン族の活動は、年配者のグループから中高年の男性のグループに、さらには絵本の挿絵を描く活動などをきっかけとして男女の若者たちの間にも広まっていきました。地元の学校や大学で教えるタイ人の先生たちからも共感を得、活動への資金援助を申し出てくれる財団も現れました。チョンの人たちは元来、近所に住む親類や友人で一ヶ所に集まって、ご飯を食べたりお酒を飲んだりしながら歓談することを好みます。この習慣を活かして活動に関わる人たちが増えていきました。

総人口約6,000万人のタイには全土で70種類もの言語が使われていて、そのうち10あまりがチョン語と同じように消滅の危機にあるとされています。大規模な開発で河川や森林の状態も悪くなるばかりです。チョンの人たちは他県にも出かけて、同じ境遇にある先住・少数民族の人びとに自分たちの経験を伝えます。同時にチョン族の活動に関心を寄せる人たちが訪ねてくることもあります。タイの南部には「パッターニー・マレー」と呼ばれるマレー語を母語とする人びとがたくさん住んでいます。次世代に自分たちの文化や信仰を伝えたいと願う人たちが大勢でチョンの村にやってきました。その後、南部ではマヒドン大学の協力で幼稚園段階からパッターニー・マレー語を使った本格的な多言語併用教育の試みが始まっています。このようにチョン族の活動は、タイ国民として生活しながら民族の文化や地元の自然を回復・維持しようと努力する人たちの参考や刺激にもなっています。 **M**



チョン族の活動を担う人びととその協力者。協力者の中には大学の研究者や地元の学校の先生もいる。時々地元で集って話し合いがもたれる。

# 挑戦は これからも続く

最大の成果はチョンの人たちが自信を取り戻したことです。一方で、これまでの活動の成果と課題を体系的に検証する時期に来ています。

これまで約10年間にわたる活動がもたらした最大の成果は、チョンの人びとの自信の回復ではないでしょうか。「わたしが小さかった頃、学校ではチョン語が禁じられ、チョンであることにこれっぽっちも誇りを持ってなかった。でも、今は違う」といった発言にはチョン族の年配者の思いが凝縮しています。チョン族が自信を持ちつづける限り、自然と文化の回復を目指す活動も続いていくでしょう。

一方で課題も少なくありません。地球規模で考えれば、生物と文化の多様性を脅かす力にはいっこうに衰える気配がありません。これに対してチョンの人たちの活動は、積極的に関わる人が減り、当初と比べると勢いがありません。チョン文化学習センターも期待されたほどには活用できていません。活動の目標を再検討し、求心力を取りもどさなければならない時期にさしかかっていると思います。最近ではチョン族の文化や周辺の自然を利用してエコツーリズムを始めようとの

意見もよく聞こえてくるのですが、具体化するにはまだ時間がかかりそうです。

この辺で、これまでの活動の成果や今後に向けた課題をしっかりとまとめる必要があるでしょう。例えば、チョンの人たちはチョン語の再生について、「チョン語が日常生活で使われるようになる」ことを活動目標に掲げています。この目標だけでも達成するのはなかなかたいへんです。この点についてチョンの人たちに話をきくと、「子どもが家で親に話す時にチョン語を使うようになった」とか、「子どもたちの学校の成績が上がったのは、タイ文字を基礎にしたチョン語文字で勉強しているおかげだ」といったうれしい声が返ってきますが、チョンの人たち全体としてどうなのかなど、あらためて調べてみた方がよいと思います。チョンの人たちだけでそうした作業を行うのは難しいかも知れませんが、今後私たちが協力を申し出ることのできる分野ではないかと考えています。 **M**



①東隣のトラート県でガソーン語を学ぶ小学生。②～④チョン族を訪問したタイ南部の住民。イスラム系の人びとが多く、子どもたちはパッターニー・マレー語を母語とする。



## もっと知りたい時は…

この冊子は、メコンの豊かさを知っていただく活動の一環として作成しました。  
内容はチョンの人びとから聞いた話やタイ語と英語の文献がもとになっています。  
今後、さらに詳しい情報をメコン・ウォッチのHPで紹介していきますので、ご注目下さい。

[http://www.mekongwatch.org/activity/conserves\\_thai.html](http://www.mekongwatch.org/activity/conserves_thai.html)

以下では、生物・文化多様性やチョン族の活動について、基本的な文献やサイトを紹介しておきます。

### <日本語>

- 大西正幸 「生物多様性と言語の多様性～オセアニアの視点から」

<http://www.elpr.bun.kyoto-u.ac.jp/essay/oonishi.htm>

- ダニエル・ネトル、スザンヌ・ロメイ (島村宣男訳) 『消えゆく言語たち-失われることば、失われる世界』 新曜社 2001年
- 地球ことば村

<http://www.chikyukotobamura.org/home.html>

- デイヴィッド・クリスタル (斎藤兆史、三谷裕美訳) 『消滅する言語-人類の知的遺産をいかに守るか』 中央公論新社 2004年
- 日本語学会 「危機言語のページ」

[http://www.fl.reitaku-u.ac.jp/CEL/onEL\\_ja.html](http://www.fl.reitaku-u.ac.jp/CEL/onEL_ja.html)

- WWF 「生物多様性の保全」

<http://www.wwf.or.jp/activities/wildlife/cat1016/>

### <英語>

- Chong. *Ethnologue: Languages of the World*, 16th edition (Paul M. Lewis. ed. 2009. SIL International)

[http://www.ethnologue.com/show\\_language.asp?code=cog](http://www.ethnologue.com/show_language.asp?code=cog)

- Conference on Language Development, Language Revitalization and Multilingual Education in Minority Communities in Asia, 6-8 November 2003, Bangkok, Thailand

<http://www.sil.org/asia/ldc/>

- Endangered Languages and Cultures, Research Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University

<http://www.lc.mahidol.ac.th/en/research-services-groups-endangered.php>

- Leanne Hinton and Ken Hale (eds). 2001. *The Green Book of Language Revitalization in Practice*. Academic Press

- Linguistic Rights, Management of Social Transformation (MOST) Clearing House

<http://www.unesco.org/most/ln2pol.htm>

- Luisa Maffi and Ellen Woodley. 2010. *Biocultural Diversity Conservation: A Global Sourcebook*. EarthScan

- Suwilai Premrirat. 2007. Endangered Languages in Thailand. *International Journal of Sociology of Language* 186. 75-93

- Terralingua: Unity in Biocultural Diversity

<http://www.terralingua.org/>



特定非営利活動法人  
メコン・ウォッチ

メコン・ウォッチは、メコン河流域国における開発事業や開発政策の影響を監視する環境NGOです。私たちの願いは、メコン河流域に暮らす人びとが開発によって被害を受けることなく、河川や森林など豊かな自然資源に根ざした暮らしを続けられることです。

\*この冊子の発行は、日本興亜おもいやりプログラムおよび財団法人イオン環境財団の助成、マヒドン大学アジア言語文化研究所・危機言語文化調査回復センターとチョン族の人びとの協力によって実現しました。深く感謝いたします。なお、この冊子の見解はメコン・ウォッチのもので、これらの団体とは関係ありません。

### 森の再生、言葉の再生

～生物・文化多様性の回復を目指すタイ・チョン族の挑戦～

発行日/ 2011年9月30日

執筆・編集・校正/ 土井利幸、メコン・ウォッチ

写真/ メコン・ウォッチ、Dr. Vicente C. Handa

ディレクション&デザイン/ FORMA Inc. 栗林孝之

印刷/ MBE 関内店

発行/ 特定非営利活動法人 メコン・ウォッチ

〒110-0015 東京都台東区東上野1-20-6 丸幸ビル2階

電話: 03-3832-5034 ファクス: 03-3832-5039

Eメール: info@mekongwatch.org

HP: <http://www.mekongwatch.org/index.html>



古紙配合の再生紙を使用しています。